

進行形の発達について*

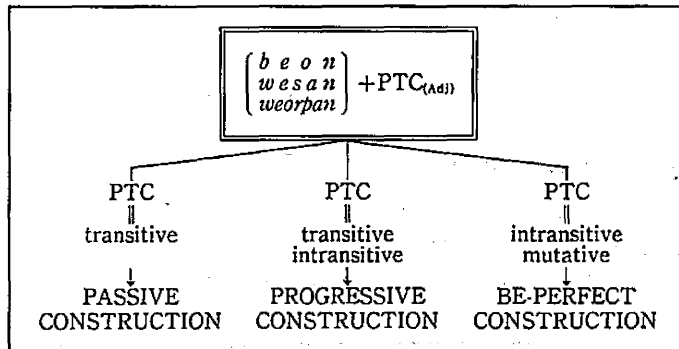
——受動形及び完了形との比較論的観点から——

橋本 功

0. はじめに

進行形、受動形、そして、変移動詞の完了形はいずれも同一構造、すなわち、図1に示されているように、主語の状態を表わす構造に遡ると考えることができる。

図 1



N.B., PTC=participle

ある一つの統語構造から複数の統語構造へと発達してゆく場合、それぞれの発達過程で相互に類似の言語現象が起こったり、あるいは、固有の発達現象が他に、または、相互に作用・影響を及ぼしあうということは十分に予測でき得る現象である。

本稿の目的は、主として、このような視点から進行形の歴史を考察することによって、進行形の発達過程に生じた諸現象の解明及び説明を試みることである。

1. 受動形の歴史

OE・ME の受動形は“lexical passive”であり、16世紀になって、“transformational passive”が導入され、be が助動詞化した(Lightfoot: 259-270)。19世紀に入ると、(1a) (2a), (3a) の各自動詞文の受動化(1b, 2b, 3b)が可能になった(荒木・宇賀治: 444)。

(1)

a) John sat on this chair. (Davison^{a, b}: 43)

b) This chair was sat on by John.

(2)

a) He slept in the bed.

b) The bed was slept in. (Lightfoot: 276)

(3)

a) Primitive men once lived in these caves. (Quirk, et al.: 1164)

b) These caves were once lived by primitive men.

但し、この種の自動詞文を受動化するには、「NP₁ live/sleep in NP₂」構造の NP₂ が “affected participant” であるという条件が伴う (Quirk, et al.: 1164-65)。すなわち、NP₁ と NP₂ との間に明確な影響関係が存在しなければならないのである。この現象を別の観点から述べるならば、NP₁ と NP₂ を受動構造という文法形式に組み込めば、受動構造そのものが NP₁ と NP₂ との影響関係及び影響の方向を示すようになると言える。このように受動構造の歴史を巨視的に観ると、受動構造は意味上も構造上も単純化の方向に向かうと同時に、増々、生産的な構造になってきたと言える。

2. 進行形の歴史

2.1. 進行形と完了形との相乗作用

進行形の機能、進行形と単純形との機能分化、及び、その使用頻度が実質的に今日の進行形に近づいたのは1700年から1800年にかけてである。下の表中の(B)は1700から1900年の間の進行形使用数の伸びを示す Dennis の統計表の一部である。

		(A)		年	(B)		
変移動詞の完了形の助動詞		BE	HAVE	1700			進行形の頻度
		82.65%	18.4%			14	
		67.1%	32.9%	1800		20	
		33.1%	66.9%			43	
	8.7%	91.3%	1900		57 exx.		
		(Rydén & Brorström)			(Dennis)		

この表によると、進行形は1800年前後にその使用数が急増している。その増加の程度は Dennis (860) が “sudden jump” という言葉で表現している程の急激な増加である。この進行形の急激な増加に関連して興味深いのは、変移動詞の完了形の助動詞 be が have へ移

行する現象である。上表中の(A)は、完了形の助動詞 be が have へ移行する様子を統計的に示した Rydén & Brorström (232-33) の統計の一部である。この表によって、変移動詞の完了形の助動詞である have の使用率と be の使用率が逆転した時期と、進行形の使用数が急激に増加した時期とがほぼ一致していることが明らかになる。

従来、be-完了形の衰退現象については、受動形の発達と関連づけて説明されるのが一般的であった。しかし、上表の統計表及び以下に述べる近代英語期における進行形と完了形との類似性を考え合わせる時、近代英語期に完了形の助動詞が be から have へ急速に移行した現象に、進行形の存在が深く関わっていたのではないだろうかという推論が可能になる。

近代英語期における進行形と be-完了形は次のような類似点を持っている：

- 1) 進行形と変移動詞の完了形は相対立するアスペクトを表すが、助動詞は、共に、be である。
- 2) 近代英語期においては進行形をとる動詞は自動詞、特に、変異動詞が多くを占めている。
[Trnka (38), Brunner (219) Ando (112) 参照]¹⁾
- 3) 近代英語期、特に初期の時代には、多くの強変化動詞の過去分詞語尾 {-en} が保存されていた。例えば、

arriven, commen, growen, melten, runnen

がそうである。これらの過去分詞語尾 {-en} と現在分詞語尾 {-ing} とが、それぞれ、[-n] に弱音化後、あるいは、弱音化の過程で音韻的交差を起こした可能性が極めて高い。[これは、動名詞語尾 {-inge} と現在分詞語尾 {-ende} との間に起こった以下のような音韻的交差からも推論可能である。

{-ende} [-endɛ] > [-end] > [-nd] > [-n] < [-ɲ] < [-ɲɲ] < [-ɲg] < [-ing]

Nakao(319)参照。]

このように、相対立するアスペクトを表わす進行形と be-完了形とは、当時、類似性の高い表現・紛らわしい構造であったと考えられる。そのために、それぞれの構造を互いに distinctive な構造にしようとする要求が生じ、その要求が大きな要因の一つとなって、当時、すでに始まっていた進行形使用の増加傾向と、be-完了形から have-完了形への移行という二つの変化に相乗効果を起こさせた。その結果、活字資料の上では1800年前後になって、進行形の増加と完了形の助動詞の be から have への移行という二つの現象が同時平行的に、突発的で急速な形となって現われたとする推論が可能である。そうすれば、Dennis が“sudden jump”という言葉で表言した程の進行形の急激な増加現象に対しても妥当な説明を与えることができる。

2.2. 進行形と「be+in/on+動名詞」構造との融合

すでに言及したように、進行形がその使用数及び機能において、実質的に今日の進行形に近づいたのは1700年から1800年にかけてである。従って、ME 期に「be+現在分詞」構造が「be+in/on+動名詞」構造（以下、動名詞構造と略称）との融合を開始し、その融合を完了させるまでに500年～600年の期間を要したことになる。この期間は、動名詞構造が「be+現在分詞」構造に吸収されることに抵抗した期間であるとみなすことができる。

Nagucka は、受動進行形出現の主要原因をここに求めている。すなわち、動名詞構造の前置

詞 on/in の弱音・無音化によって動名詞構造が、表層上は「be+現在分詞」と同一構造になった。しかしながら、表層上は同一構造になったにもかかわらず、態 (voice) に対して中立であるという動名詞の内在的特徴を不透明 (opaque) な状態のまま保持し続けた。その結果、態の解釈に曖昧性が生じるケースが増加してきたので、そこからくる混乱を防ぐために形式と意味とが一致する合理的な構造の受動進行形を誕生させたとしている。

2.3. 進行形と文法的圧力

進行形と同一の起源に遡る「be+過去分詞」に構造変化が起こって “transformational passive” が可能になった (Lightfoot: 263)。「be+現在分詞」も動名詞構造と融合し、動名詞構造を吸収した後、同じく、構造変化が起こった。すなわち、「be+現在分詞」構造の be が助動詞化し、今日の進行形が誕生したと考えることができる。

[この仮説を立てる根拠として、次のような事実を挙げることができる。すなわち、OE や ME の「be+現在分詞」構造は、“an activity durative in character”を表わす傾向にあり、そして、この構造の現在分詞形をとる動詞は自動詞が中心である。たとえ対格目的語を従える動詞であっても、この構造で現在分詞として用いられる場合には、対格目的語を従えない傾向にある (Mitchell: 276-277)。また、Ælfric の使用する進行形の27%は *wunian* の進行形であり (*ibid.*)、そして、T. Malory の作品の進行形57例のうちの32例 (約56%) は *live* の進行形である (Nakashima: 285-289)。これらの事実によって、OE・ME における「be+現在分詞」構造の現在分詞は動詞的性質よりも形容詞的性質が強かったという事実を推察することができる。そして、ME 末期から近代英語期になると、すでに言及したように自動詞、特に変移動詞がこの構造の現在分詞形をとる傾向が顕著になってくる。この段階を経た後、急速に「be+現在分詞」構造が今日の進行形へと発展していくのである。このプロセスは、「be+現在分詞」構造の表わす意味が「状態」的意味から動作的な「継続・推移」的意味へと変化してきたこと、すなわち、この構造の現在分詞が形容詞的機能から次第に動詞的機能を高めていったことを表わしている。]

いずれにせよ、進行形という文法形式が、一度、英語国民の言語直感に根を下ろし、そして、「未完了・一時的継続・一時的推移」という基本的意味を獲得したならば、受動構造の歴史がそうであったように、進行形という文法形式そのものが強力な圧力 (force) を持ち始め、一般に進行形をとりにくい状態動詞までも、進行形という文法形式に組み込まれると、その文法形式が進行形をとった動詞に対して「一時的継続・一時的推移」という意味素性を付与したり、あるいは、進行形をとる動詞が「状态的」、「非状态的」いずれの意味素性をも持っている場合には、その動詞から「非状态的」意味を選択させるという非常に生産性の高い構造になってきたと言える。

Comrie (11, 39 & 99) によれば、英語の進行形の発達にはケルト語族の進行形の発達過程に類似している。すなわち、ケルト語族のうち Irish の進行形は、未だ、単純形との意味的対立を保持しているが、Welsh の進行形はその段階を通過して、習慣や状態の意味までも表わすようになっている。この Welsh の進行形と同様、今後、英語の進行形は増々その機能を拡大させるであろうと予測をしている。

[ケルト語における進行形の構造は、「be+現在分詞」ではなく、英語の「be+on/in+動

名詞」に対応する構造である。本来この構造は、対応する英語の構造と同様、「進行中」を表わしていた。Welsh ではその意味を拡大させて、未完了全般を表わすようになってきた。このケルト語の構造を Comrie はケルト語の進行形と呼んでいる。]

用例1～5の進行形をとっている動詞(句) *cost*, *matter*, *resemble*, *depend on*, *understand* は、状態動詞の範疇に入る動詞である。しかし、これらの動詞は進行形をとった時のみ、「一時的変化」あるいは「段階的推移」(gradual change)を表わすようになる。

[安藤貞雄関西外国大学教授から、「これらの進行形が「段階的推移」を表わすのは、*more*等の副詞が存在するためではないのか」という御指摘があった。それに対して小野捷関西外国語大学教授(本シンポジウムの司会者兼講師)から、「*more*等の副詞が存在しなくてもこの種の進行形が段階的推移を表わす例がある」という事実が報告された。]

さらに、用例6～13においては *that*-節を従えた状態動詞, *suppose*, *hope*, *believe*, *think*, *know*, *remember* が進行形をとっている。この種の進行形の用法について Leech (24) は次のように説明している。すなわち、この種の動詞を進行形にすることによって、動詞の表わす心的態度が「一時的」であることを表わすようになる。一時的という概念が付与されるが故に、この進行形による表現は単純形による表現に比べて断定の調子がなくなり丁寧に響くのである。

- (1) *Pil products are costing more since 1973 crisis.* (van Ek & Robat: 235)
- (2) *The income ... is mattering less nowadays when one applies for grant.*
(van Ek & Robat: 235)
- (3) *He is resembling his father more and more as the years go by.* (Leech: 26)
- (4) *Young people are depending less and less on the advice of their elders.*
(van Ek & Robat: 23)
- (5) *I'm understanding more and more about quantum mechanics as each day goes by.* (Comrie: 36)
- (6) *I am supposing (=provisionally assume), of course, that what you say is true.* (van Ek & Robat: 234)
- (7) *I'm hoping Sebastian will come and stay with me ...* (Waugh (Ooe: 79))
- (8) *He was believing that he should triumph* (G. Eliot (Mossé: 245))
- (9) *I'm thinking that I could say 'too bad' and mean it.* (M. Peake (Visser: 1978))
- (10) *he is knowing that if ever he is appealing to Mayor Paget in person, all is well.* (T. Hinde (Visser: 1978))
- (11) *I was only remembering that you used to think you knew her in the days ...* (J.M. Barrie (Visser: 1977))
- (12) *she was ... feeling also that she was being treated as an old friend in the form of a very old woman.* (G. Meredith (Mossé: 245))
- (13) *You are not believing me* (R. Chandler (Ljung: 47)).

これらの動詞は、一般的には、「一時的」という概念とは相入れない意味を表わす動詞、

つまり、進行形をとらない状態動詞である。それにも関わらずこれらの動詞が進行形をとることができるようになったのは、進行形という文法形式が状態動詞に対して「一時的状態・一時的推移」という意味素性を付与できる圧力 (force) を持つにいたったからであると考えられる。

進行形の歴史について以上のような説明の仕方を取り入れるならば、状態動詞が進行形をとるにいたった歴史的経緯の説明が容易になると同時に、説明に一貫性を持たせることが可能になる。例えば、進行形の中でも最も最近になって現われた名詞の進行形については次のような説明を与えることができる：

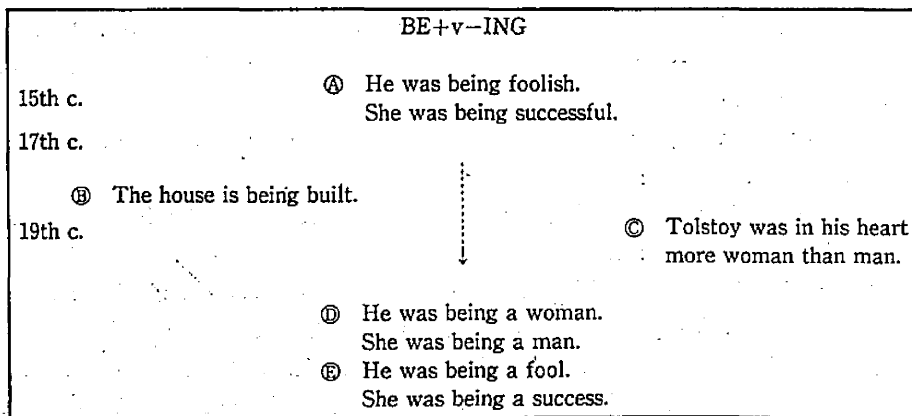
Be 動詞は、'Be kind.' 'Don't be a fool.' 等の命令文にすることが可能であることから明らかなように、状態の意味だけではなく推移の意味をも持っている。従って、進行形という文法形式が be 動詞から「一時的推移」という意味素性を選択させる。

3. You are being a bore 型進行形出現の背景

名詞の進行形が登場したのは19世紀末である。本節では、この時期になぜ、そして、どのようにして名詞の進行形が誕生したのかを考察する。

図2は名詞の進行形出現に関係があると考えられる19世紀末の言語環境を図式化して示したものである。

図 2



その環境は、以下の3種類の言語現象にまとめられる：

- 1) 19世紀末には進行形の意味機能が十分に発達しており、進行形が安定した英語表現になっていた。
- 2) 形容詞の進行形 (be being + 形容詞) が15世紀後半に、そして、受動進行形は17世紀後半 (初例1653年, 橋本 (32) 参照) に登場し、いずれも、19世紀末には安定した表現になっていた。その結果、19世紀末には「be + being」という collocation が有意な単位と

して認識されていたと考えられる。

- 3) 図2の◎及び例文(14-16)にみられるような名詞の疑似形容詞的用法の使用が19世紀に、特に、頻繁になっていた(Visser: 230-233)。

- (14) 1837: If she had been *a woman* she would have died long ago. (Dickens (Visser I: 233)).
 (15) 1862: He would rather have been *gentleman* than *genius* ever so great. (Thackeray (Visser I:233)).
 (16) 1914: Tolstoy ... was in his heart more *woman* than *man*. (Times (Visser I: 233)).

以上のような言語環境の中から名詞の進行形が出現した過程を、以下のように推論することができる。

第一に、名詞の疑似形容詞な用法、例えば、図2の◎及び例文(14-16)におけるような *woman* や *man* を用いたことのある話者であるならば、この種の疑似形容詞的用法の名詞を図2の④の進行構造の形容詞と置換することはそれほど抵抗がなかったものと考えられる。その結果、図2の◎及び例文(17-20)の名詞の進行形が誕生することになる。

- (17) no doubt then I was being *a woman*, now I am talking as an artist (E. F. Benson (Mossé: 153))
 (18) you're being *a child* (P. Taylor (Kirchner: 103.16))
 (19) 'I'm not a rude thing,' Jenny declared. 'I'm being *a boy*.' (Dor. Sayers (Visser II (2nd half: 1957)).
 (20) That's our son ... At the moment he's being *a flying squad car* from Scotland Yard. (C. Dickson (Visser II (2nd half: 1957)).

第二に、図2の④及び例文(21-23)で進行形をとっている形容詞 *foolish*, *successful*, *helpful* を、それらと同族の名詞形である *fool*, *success*, *help* とそれぞれ置換した結果生まれる文、例えば図2の⑥及び類例(24-27)は、図2の④及び例文(21-23)と意味上極めて近い距離にある。特に、図2の◎にあるような名詞の疑似形容詞的用法を日常使用する話者にとっては、この種の置換は極めて容易であったと考えることができる。

- (21) He is being a little *foolish*. (Forster (Schopf: 269))
 (22) she was not being very *successful* (E. F. Benson (Jespersen: 224)).
 (23) You are not being *helpful*, Gretta. (E. Caldwell (Yoshida: 51)).
 (24) in certain matters you are being *a fool*. (H. G. wells (Visser II (2nd half: 1957)).
 (25) At last, so it seemed, she was being *a success*. (A. Christie (Ooe: 86)).
 (26) The bridge party was not being *a success*. (E. Waugh (Visser II (2nd half: 1958)).

- (27) (He) wasn't being any *help* at all (Mitchell (Schopf: 271)).
- (28) 1926: I've always wanted to be a detective. I'm being *one* now. I'm collecting clues. (A. Christie (Watanabe: 370)).
- (29) 1945: He was being *a soldier* then, you see. He was doing that all the time I knew him. (M. Allingham (Watanabe: 370)).
- (30) 1952: long as you are being *one* of them Sybils, tell me about this bird Jones (W. Faulkner: (Kirchner: sections. 103.16))

以上の分析結果から判断するならば、19世紀末には名詞の進行形が現われるための言語環境が十分に整っており、名詞の進行形は極めて自然に発生したものと考えられる。

Mossé (152-153), Schopf, Visser (1957-1958) が集めた名詞の進行形を名詞の種類で分類すると、初期の段階で進行形をとっていた名詞は、道徳的・精神的状態や特徴を表わす名詞、あるいは、それを metaphorical に表わすために用いられた名詞に限定されている。[例文 (17-20) 参照。] しかし、20世紀に入ると、道徳的・精神的状態や特徴以外の意味を表わす名詞も進行形をとり始めている。[例文 (28-30) 参照。] これは、図2に基づく名詞の進行形誕生の過程から、ある程度、予測可能な現象である。もっとも、この現象については今後さらに資料の確認を必要とするであろう。

* 本稿は、近代英語協会第6回大会(1989年5月19日、於大東文化大学)におけるシンポジウム『近代英語における進行形の発達』で筆者が担当した「You are being a bore 型進行形の歴史」の原稿を紀要論文用に加筆・修正したものである。このシンポジウムに参加する機会を与えて下さり、発表の準備段階から有益な御助言を下された小野捷関西外国語大学教授に深く感謝いたします。

註

- 1) 本文中の[]内は、註記であることを示す。

BIBLIOGRAPHY

- Araki, K. and M. Ukaji (荒木・宇賀治) (1984). 『英語史ⅢA』大修館。
- Åkerlund, A. (1911). *On the History of the Definite Tenses in English*. Lund: Berlingska Boktryckeriet.
- Ando, S. (1976). *A Descriptive Syntax of Christopher Marlowe's Language*. Tokyo: Univ. of Tokyo.
- Bøgholm, N. (1939). *English Speech from an Historical Point of View*. Copenhagen: Nyt Norddisk.

- Brunner, K. (1955). "Expanded Verbal Forms in Early Modern English," *English Studies* vol. 36, pp. 218-221.
- Charleston, B.M. (1960). *Studies on the Emotional and Affective Means of Expression in Modern English*. Bern: Francke Uerlag.
- Comrie, B. (1976). *Aspect*. Cambridge: CUP.
- Davison^a, A. (1980). "Peculiar Passive," *Language* vol. 56, pp. 42-66.
- Davison^b, A. (1984). "Syntactic Markedness and the Definition of Sentence Topic," *Language* vol. 60, pp. 797-846.
- Dennis, L. (1941). "The Progressive Tense: Frequency of Its Use in English," *PMLA*, vol. 55, pp. 855-865.
- Fagan, Sarah M.B. (1988). "The English Middle," *Linguistic Inquiry* vol. 19, Number 2, pp. 181-204.
- Hashimoto, I. (橋本) (1975). 「17世紀前半の散文における進行形の調査」『英語英文学研究』(広島大学英文学会), vol. 20, pp. 25-39.
- Hosoe, I. (1932). *An Enquiry into the Meaning of Tense in the English Verb*. Tokyo: Taibundo.
- Jespersen, O. (1965). *A Modern English Grammar*, vol. 4. London: G. Allen & Unwin; Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- Kaga, N. (1985). "The Syntax of *BE* and *HAVE*; Aux or Main Verb," 『英文学研究』 Vol. 42, part 2, pp. 275-292.
- Kirchner, G. (1970-1972). *Die syntaktischen Eigentümlichkeiten des amerikanischen Englisch*, 2 vols. (trans.) G. Maejima, et al., (1983). 『アメリカ語法辞典』大修館.
- Leech, G.N. (1971). *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- Lightfoot, D.W. (1979). *Principles of Diachronic Syntax*. Cambridge: CUP.
- Ljung, M. (1980). *Reflections on the English Progressive*. Göteborg: Acta Universitatis Gothoburgensis.
- McLaughlin, J. (1983). *Old English Syntax; A handbook*. Tübingen: Max Niemeyer.
- Mossé, F. (1938). *Histoire de la forme périphrastique être+participe présent en Germanique* vol. 2. Paris: Librairie C. Klincksieck.
- Nagucka, P. (1981). "Explorations into Syntactic Obsolescence: English *a-X-ing* and *X-ing*," *Historical Syntax*. (ed.) J. Fisiak. Berlin: Mouton, pp. 363-382.
- Nakashima, K. (1981). *Studies in the Language of Sir Thomas Malory*. Tokyo: Nan'undo.
- Ooe, S. (大江) (1982). 『動詞 (I)』研究社.
- Quirk, R. et al. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.
- Rydén, M. & S. Brorström (1987). *The Be/Have Variation with Intransitive in English with Special Reference to the Late Modern Period*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Scheffer, J. (1969). *The Progressive in English*. Amsterdam: North-Holland.
- Schopf, A. (1962). "He is being clever," *Anglia*, vol. 81, pp. 267-297.
- Trnka, B. (1930). *On the Syntax of the English Verb from Caxton to Dryden*. Prague: Jednota Ceskoslovenskych Matematiků A Fysiků.

- van Ek, J. A. & N. J. Robot. (1984). *The Student's Grammar of English*. Oxford: Basil Blackwell.
- Visser, F. Th. (1973). *An Historical Syntax of the English Language* 3 vols. Leiden: E. J. Brill.
- Watanabe, T. (渡辺) (1976). 「be の進行形 (be being ...)」 S. Ando, *et al.* *A Dictionary of Current English Usage* II. 大修館, pp.368-371.
- Wekker, H. Chr. (1976). *The Expression of Future Time in Contemporary British English* Amsterdam: North-Holland.
- Yasui, I. (安井) (1972). 「英語の動詞表現における進行形について」『英語学』vol. 3, pp.72-96.
- Yoshida, T. (吉田) (1950). 「アースキン・コールドウェルの作品にみられる「進行形」の口語用法について」『京都産業大学紀要』vol. 1, pp.29-56.

On the Development of the Progressive Construction

—Interplay of the Progressive, the Passive and the Perfect—

Isao Hashimoto

ABSTRACT

This is a tentative study of the development of the progressive form, from the viewpoint of the interinfluence or interplay of these three constructions; the passive, the *be*-perfect and the progressive. This is because they all derived from one and the same construction, that is, "NP+*beon/wesan/weorpan*+participle", where the participle, present or past, functioned as an adjective, so that each of them might have developmental phenomena similar to the other two or various linguistic phenomena which might stimulate the development of the other constructions. On the basis of this hypothesis, there are discussed mainly the reason why the progressive construction began to be used suddenly with a high frequency and the functions similar to those in the Present Day English during the period 1700 to 1800 and the reason why the stative verbs came into use in the progressive construction in the Present Day English period. Rather independently, linguistic backgrounds where the type 'He is being a fool' appeared in the 19th century are dealt with in the last section.